

FASHION・MUSIC・SPORTS・FILM・ART・STYLE

0-24

It's Happening Anytime On The Street

ワールド
エンターテイメント
マガジン

1996・2・1
アサヒグラフ増刊
620 yen

大正12年11月23日第3号郵便物認可
1995年2月11日発行 通巻384号 増刊





OZWALD BOATENG

オズワルド・ボートング。ビスポーク(注文版)・テイラー。ロンドン在住。1967年2月22日生まれ。ガーナ出身。95年12月、ついにスーツの本場、サヴィル・ロウに出店した(9, Vigo Street, Savil Row)。鮮やかな色とシャープなカットラインを特徴とするオズワルドのサヴィル・ロウ進出は、大きな話題を呼んだ。英国のテイラーとして初めてメンズ・ファッション・ウィークでショーをするなど、つねに伝統の世界に革新の風を送り込んできた。自らのコンセプトを、デザインとテイラーの世界を両立させた「ビスポーク・クチュール」と呼び、「新しいタイプのメンズ服のクチュリエ」を目指していると語る。



Q

ライター。「DEADMEAT」という小冊子を書き、ナイトクラブなどで配り歩き話題を呼んだ。Qというのはもちろん、ペンネーム。独特なサングラス(?)をかけたその風貌は一度見たら忘れられない。「デッドミート」はQが長年追ってきたプロジェクト。ラップに近い文体で綴られた小冊子はすでに2冊発行された。続いて朗読テープを発表。現在は、ビデオ制作に取り組んでおり、最終的には映画製作を目指している。「Q」は彼の一つの顔であり、山本耀司のコレクションにも出演したクワ・ピナという名前を持つモデルであり、数本の映画に出演した俳優でもある。近々、インターネット上でホームページを開く予定だという。



LAMINE KOUYATE

ラミン・クヤテ。ファッション・デザイナー。マリ首都バマコ生まれ。マリ人の父、セネガル人の母は、ともに医者。1980年代はじめにセネガルに移り、その後、建築を学ぶためにフランスに渡った。ストラスブール大学で建築士の資格を取得。その後もパリで3年間建築を学んだが、89年、友人と「ファッキン・ファッション・ファクトリー」XULY BET(ズリー・ベット)をスタートさせた。リサイクルをテーマに、集めてきた古着や売れ残りの素材をパッチワークのように組み合わせ、まったく新しい服を作り変えていく。XULY BETとは、セネガルのウォロフ語で、好奇心に満ちた目で見る、という意味だそう。



LOKUA KANZA

ロクア・カンザ。ミュージシャン。1958年4月21日、ザイル東部のブカブで生まれ、キンシャサで育つ。幼少のころから聖歌隊で歌い、11歳でバンドを組んだ。19歳で本格的に音楽活動をはじめ、20歳のとき、コートジボワールのアビジャンに移った。84年にパリに移り、ギタリストとして、レイ・レマヤマヌ・ディバンゴなどのバンドで活躍。94年、デビューアルバム「大地と密林の歌」を発表。ザイルが誇るダンス・ミュージックとは異なる、森をモチーフにしたスピリチュアルな世界で魅了した。95年秋には「ワビ・ヨ」(BMG ピクチャー、BVCP-885)を発表。幅を広げ、よりメロウでポップな音楽世界になっている。



KEZIRE JONES

キサリア・ジョーンズ。ミュージシャン。1970年1月10日生まれ。ロンドン在住。ナイジェリア出身。エレクトロニクス会社を経営する父の指示で、78年、8歳のとき1人、故郷を離れ、英国の全寮制パブリックスクールに留学。黒人生徒は彼一人だった。高校を卒業すると、親の反対を押し切って、クラブやストリートで演奏するミュージシャンになった。92年に、アルバム「ブルーファンク・イズ・ア・ファクト」(ヴァージン、VJCP-28104)でデビュー。超絶的なギターサウンドで話題を呼んだ。95年、3年ぶりに2枚目のアルバム「アフリカン・スペースクラフト」(ヴァージン、VJCP-25147)を発表した。



IKE UDE

アイケ・ウデ。ナイジェリアのエヌグ出身。編集者、コンセプトアルバム・アーティスト。カルチャー誌「aRUDE」を95年から編集、発行している。ニューヨーク在住。アーティストとしては、イタリアの「ヴォーグ」誌の表紙を題材に、ロゴを残したまま自らカバーガールを演じ、イメージの問題を取り上げた。最近作では、映画のポスターを用いて、マリリン・モンローを黒人にしてみたり、人種とジェンダーとコロニアリズムをテーマに創作を重ねている。グッゲンハイム美術館で今年行われるアフリカ人写真家のグループ展「インサイト」に企画段階から参加している。今年の春先には、東京のギャラリーでも展覧が行われる予定。



CHEICK OMAR SISSOKO

チク・オマール・シソコ。映画監督。マリ共和国の首都バマコ在住。1945年12月21日生まれ。昨年秋のニューヨーク・フィルム・フェスティバルに招かれ、招待作品の新作「GUIMBA」が絶賛された。本人にとって2本目の長編となる本作品で、現代を視野に入れつつ、古代アフリカの王権を舞台に、美しい映像とともにアフリカの豊かさや権力の本質を描いた。68年からフランスに渡り、働きながら大学に入学。アフリカ独立闘争など、自治会での学生運動を通じ、専攻を数学から社会学に変え、同時に映画を学び始めた。76年にマリに帰国。ドキュメンタリーを中心に活動。次作は「創世記」というタイトルの長編だそう。



OUSMANE GUEYE

ウスマン・ゲイ。彫刻家。セネガル出身。1956年生まれ。6歳のときに、兄のスクリュウ・ドライバーで岩に人の顔彫ったのが最初の「作品」。16歳で、ダカールのEcole des Artsに入学。その後ローマとパリで彫刻を学んだ。セネガルとフランスを拠点に活躍していたが、夫人の仕事の関係で、91年から2年間滞日。その後ニューヨークに移り、グッゲンハイム美術館など全米各地の美術館・ギャラリーでの個展、セントラル・パークやリンカーン・センター前の10ブロックを飾る木彫り彫刻プロジェクト、ラングストン・ヒューズ図書館の外装オブジェなど精力的に活動している。今年から再び滞日する予定である。



〈アフリカ人〉〈アジア人〉〈オリエンタル〉という
作られた枠内に留まるように圧力がかかる。それは
警察が立ち入り禁止区域を設けるようなものだ。

New York

Black
Atlantic
From brother to brother.



ニューヨークには夜に着いた。JFKから、ウスマン・ゲイのアトリエ「ブルー・フォレスト・ギャラリー」に電話を入れた。

「今から家に帰るところだ。O.J.シンプソンの判決がどうなったか知ってるか。無罪だ！ 今からニュースを見に家にラッシュして帰るから。明日また電話してくれるかい」

ウスマンはセネガルのダカール出身の彫刻家である。フランスで彫刻家としてのキャリアを築いたウスマンは、夫人の仕事の関係で、81年から2年間、東京に滞在していた。その後、ニューヨークに移り住み、ハーレムに住みながら、創作活動を続けてきた。東京の三軒茶屋のマンションでは、小さな石彫作品しか作れなかったウスマンだが、ニューヨークでは、古い倉庫のワンフロアを何人かのアーティストと分け合い、木彫りなどの大きな作品を作り始めた。小さな作品もカラフルな絵もいろいろ、ウスマンの本領がもっとも発揮されるのは、拾い集めた朽ちた木々を彫り、色を塗り、再生させ、広大なスペースに植え付けていく作品である。今年には、リンカーンセンターの前の目抜き通りに大きな作品を展示するという。

「僕にとっては最高の舞台だよ。とても美しいものになるはずだ。どんな人の目にもとまるといえることが、僕が一番求めていることだからね。できるだけ分かち合えてほしいんだ」

ウスマンは予想以上に元気だった。ミッドタウンのチェース・マンハッタン銀行のギャラリーでのオープニングが迫っていた。アシスタントをつとめるジョーが主に外との交渉に当たっていた。ちょび髭をはやし、はげ上がった、いかにも人のよきそうなジョーの本職はカメラマン。後のマイルス・デイビスや黒人作家ジェームス・ポールドウィンなどのポートレートは、サザビーに買い取られている。優秀なアシスタントを得て、ウスマンの創作活動は順調に上昇していた。ハーレムにあるポールドウィンの葬儀が行われたという古い教会にいくという。ウスマンはクリスチャンではない。教会の近くに降り立つと、太鼓の音が聞こえ始めた。教会堂の中の椅子は取り払われ、セネガルの太鼓、サバール奏者が5人、休みなく叩き続ける。アフリカン・ダンスクラスだった。先生もセネガル人。サバール奏者も、有名なパーカッションバンドに在籍していたものも多い。場所柄、生徒のほとんどがアメリカ黒人女性。男性は1人だけ。ダンスクラスは2時間近くほとんど太鼓の音が休むときがないまま続けられた。サバールを叩いたウスマンは、イースト・ハーレムにあるアフリカン・レストランに案内してくれた。客の1人がコラを演奏していた。セネガル人経営で、ウォロフ語が飛び交っている。ご飯とサラダがたっぷりついた魚フライ定食が5ドルほど。安くうまい食堂である。レストランを出て、白タクに乗る。ウォロフ語で交渉された値段はミッドタウンまで8ドル。イエロー・キャブの半額に近い。セネガル人の中で金を回し、助け合っていた。

テレビは、シンプソン事件の報道一色。その合間を縫ってニューヨークを洗濯に連れて来たのは、ポープことバチカン教皇だった。シンプソン無罪判決の翌日に到着。ミッドタウンを中心に洗濯がひどくなり、ホテルは軒並み満室状態になった。身動きがとれない状態だ。

キザイアに紹介を受けたアイケに会いに行った。彼の画廊が開かれていますギャラリーでの持ち合わせとなった。彼はアルド(ARUDE)という名前のアートを中心とした雑誌の編集・発行人でもある。アーティストとしてのアイケの作品は、コンセプチュアル・アートだ。最初のシリーズは、「ヴォーグ」誌の表紙を使ったパロディー作品だ

った。同じ書体を使った、本物のヴォーグと一見まったく同じに見える表紙に、よく見るとアイケが登場し、見出しの内容も「ナイジェリア作家、ベン・オクリのロンドン」など、およそヴォーグ誌には似つかわしくないものになっている。そして今回のシリーズは、映画のポスターを使った作品だった。アフロヘアに黒い肌のマリリン・モンローが描かれる「ノーマ・ジーン」、「レベール・ジーニアス」(反抗する天才)とつけられた作品には、巨大な顔の絵に、エメ・セゼール、フランツ・ファノン、ショインカ、フェラ・クティ、ジャック・デリダなどの名前が入っている。どの作品にも共通するのは、流通するイメージに対する拒絶である。根拠のあるパロディーと言ってもいいかもしれない。作品を理解したところに、アイケ本人が入ってきた。メークはしているが、ドラッグ・クイーンのような感じはなかった。いかにもアート系といった格好といい、やや神経質そうな表情といい、いかにもニューヨークだが、人当たりは丁寧で柔らかい。アイケもキザイアと同じナイジェリアの出身。キザイアはヨルバだが、アイケはナイジェリア東部のイボ族だ。ピアフラといったほうが分かりやすいかもしれない。エヌグという街の出身だ。82年にニューヨークにやってきた。

「これらの作品は鏡の役割を果たす。作品を通して、自分がどのような衣装を着ているかわかるだろう。人種とジェンダー(性差)が中心のテーマ。ジェンダーはあまりにも操作されやすいもの。絶対的なものではないのに、多くの人は絶対的なものとして受け取っている。人種についても同じことがいえる。〈アフリカ人〉〈アジア人〉〈オリエンタル〉という作られた枠内に押し込めようとする圧力がかかる。それは、警察が立ち入り禁止区域を設けるようなものだ。こうして人は、人種アイデンティティーの囚われ人になってしまう」

アイケは理路整然と語る。押しつけられるものをすべて拒否し、システムの矛盾、権力関係に敏感なアイケの作風は至ってシンプルだ。アイケは無色透明な世界に憧れているように思える。完全に個人に立脚したユートピアを彼は求めている。

「歴史的にヨーロッパ人は、世界の専門家たりえた。彼らだけが移動を許され、世界を旅し、他者を見出し、定義した。ヨーロッパ人以外は語る声を持つことを許されなかった。私は、自分自身について、自分自身で語りた。誰にも私について語られたくない」

アイケは、支配される側にもクリティカルだ。故郷ナイジェリアに対する距離感もキザイアとは微妙に違ってくる。無色透明になれない世界に対しての苛立ちがあるように思える。彼の言葉はつねに正しいのだが、誰のために彼は主張しているのかが見えにくくなってしまふ。それは彼の作品に、どこか閉鎖的な空間を見せようのと同じ感覚だ。客観性を主張したいのかもしれないが、どこか力がない。受け入れられ、認められたいという欲望へとアイケの主張は連なっているようにも見える。欲望自体はともあれ、表現がどこか最後で内側に戻ってしまうところに、彼なりの苦悩が読みとれる。ラディカルな言葉とは裏腹に、生活の中ではエッセンスなルーツを拒絶してしまったアイケと、空間を自然にルーツに近づけるウスマンのあまりの違いに驚かされる。

ニューヨークは、無色の個人になることを要求する。抵抗を続けるアイケの方が移民都市・ニューヨークの腹にはまりかけているように思えたのである。

